

Ovidius, *Metamorphoses*, 13.146–7

中川未来

『変身物語』13巻146–7行目は、大アイアスとの間でアキレウスの武具を争うオデュッセウスが、自らの武具継承を成功させるために、自身の血筋の高貴さを主張する場面である。彼はここで、母方の祖先ヘルメスとの関係を述べる。Tarrantに従えば、本文は以下のようになっている。

est quoque per matrem Cyllenius addita nobis
altera nobilitas;^{*1} deus est in utroque parente.

この箇所に対する伝統的解釈においては、施されている句読法からすると、146行目のestは受動態を構成する助動詞として捉えられていると考えられてきた節がある^{*2}。つまりest additaが本動詞であり、またadditaに対する主語は女性名詞に限られるのでaltera nobilitasが主語と取られ、全体では「母方を通して、ヘルメスという更なる高貴さが、私に与えられている」といった意味になる。

しかし以上のような解釈には難点がある。Cylleniusをaltera nobilitasの同格として理解しているために、「更なる高貴さ」という単なる抽象名詞が、具体的な神の名前「ヘルメス」よりも強調されてしまっているのである。問題の箇所の直前、144–5行でオデュッセウスは以下のように父方の血統について主張している。

nam mihi Laertes pater est, Arcesius illi,
Iuppiter huic—neque in his quisquam damnatus et exul.

ここでは内容また語順からも明らかである通り、父の祖先がゼウスであるということに主眼が置かれている。これらの行の直後に146–7行が続くのであるから、強調されるべき

^{*1} このセミコロンの部分にコロンの部分がある校訂本もあるが、それに関しては問題としないこととする。ピリオドを用いればasyndetonと解釈できるので理解がより容易になるようにも思われるが、ここでは論点を絞るためあえて通例に従った。

^{*2} 流布している翻訳の中では、LafayeによるBudéの仏語訳がこのように捉えられる表現を提示している。MillerによるLoebの英語訳はこの点については曖昧な訳となっている。本稿は、句読法を再考することによって明快なラテン語を構成することもわれわれの仕事に含まれるのではないかと、という主張を示すことも意図していることをご理解いただきたい。これといった句読法を施さないことによって、二重の解釈の余地を残すのが適切である場合があることも筆者は認めるが、この箇所についてはその限りではないとも主張する。なお管見の限りでは、この箇所について、いかなる内容をもってであれ明確に説明したものは見当たらない。

は、新たに祖先として紹介される神が具体的にどの神であるかということである。

加えて、147行の後半部の表現 *deus est in utroque parente* 「どちらの親の側にも神がおいでなのだ」からも、オデュッセウスは自らの血筋における神の存在を声高に主張しているのだと読み取れる。このような観点から考えると、問題の箇所に対する伝統的解釈、および伝統的句読法には不足がある。

最善の解決策として考えられるのは、*Cyllenius* の後にコンマを施すことである。筆者が参照した校訂本の中には、そのうち最も古くは1702年に出版された *Heinsius* 校訂本なのだが、146行のこの箇所にコンマを施しているものは存在しなかった。この処置を実際に行った本文は以下ようになる。

est quoque per^{*3} *matrem Cyllenius, addita nobis*^{*4}
altera nobilitas; deus est in utroque parente.

私に付け加えられた更なる高貴さとして、母方にも
ヘルメスがいる^{*5}。どちらの親の側にも神がおいでなのだ。

このようにコンマを加えると、上記のような解釈となる。強調されるべき *Cyllenius* を主語と捉え、またそれに対する同格として *addita nobis altera nobilitas* を理解することができるのである。同格の語は後置されることが普通なので、この方がより自然であろう。

更にこの処置によって、文頭に置かれている *est* が助動詞ではなく存在動詞として機能するようになる。これもまた *est* の位置からするとより自然な文法的理解だと言えよう。

(北海道大学)

^{*3} Bömerはこの *per* について *Metamorphoses*, 13.134 を参照するよう注釈を付けており、当該部分での *per* とそれに後置される対格を *instrumental* として理解している。

^{*4} *addita nobis* とそれに続く *altera nobilitas* には頭韻と類韻が意図されているように見え、*addita ... nobilitas* を2つの音的に呼応する部分からなるひとかたまりとして捉えることで、この技法の効果がより明確になる。この点については、ご指摘下さった無記名の査読者に感謝の意を表したい。

^{*5} *per* が母親に相当する語を伴い、母が子を生むといった関係を表す類例としては *Pacuvius trag.* 403.-R.; *eundem (= Vlixem) filios sibi procreasse per Calypsonem autumant.* が挙げられる。なお、この注の存在も *per* の類例を探すようご指摘下さった査読者に依る所が大きい。感謝とともに記す。